

ヤマブシタケの殺菌原木栽培

1 はじめに

キノコの栽培方式には、現在、大きく分けて原木栽培と菌床栽培の二つがあります。殺菌原木栽培は、この両手法を合わせたものです。

普通の原木栽培では、長さ1m、直径10cm程度の原木に種駒を打ち込みます。殺菌原木栽培では、長さ15cm程度に玉切りした原木を菌床栽培用の袋に入れ、菌床栽培の培地のように、殺菌釜で殺菌してから種菌を接種します。マイタケでは、栽培方法の一つとして定着しています。

農山村におけるキノコ生産、農林業を取り巻く状況には、現在、様々な課題があります。有利なキノコ販売のための多品目化、遊休キノコ施設の有効活用、整備の遅れている里山の活性化、荒廃農地の有効利用、地産地消の促進など、です。

これらの解決策の一つとして、いろいろなキノコについて殺菌原木栽培を検討しています。遊休施設や里山の活用、地域特色のあるキノコ生産のために、この方法が有効と考えています。実際に、キノコや山菜の直販を行っている生産者や生産グループと協働して実証試験も進めています。

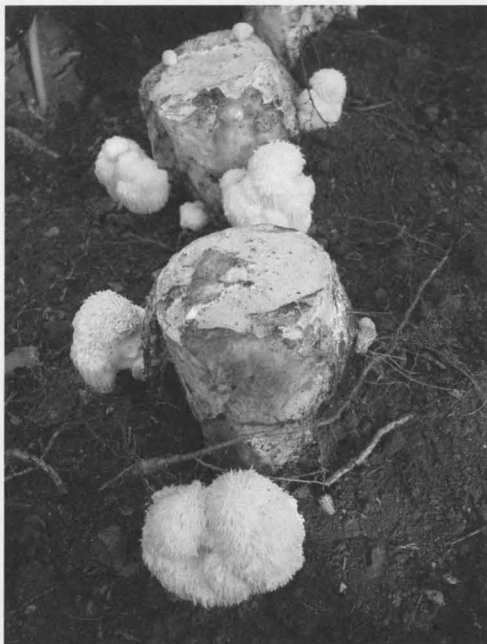


写真-1 ヤマブシタケ殺菌原木栽培

今回は、これらの試験例や実証例の中から、ヤマブシタケについて紹介します（写真-1）。

「ヤマブシタケの栽培」については、技術情報No.109（2002）において、菌床栽培方法とヤマブシタケの持つ機能性に関して報告しています。合わせてご覧いただければ幸いです。

2 殺菌原木栽培試験

殺菌原木栽培により、普通原木栽培や一般的な菌床栽培とは異なった形態や特色ある栽培特性の出現を期待しています。また、これまで栽培の難しかったキノコの発生が、容易になる可能性もあります。

試験地を白田町平（カラマツ・アカマツ混交林）、飯田市野底山（スギ林）、林業総合センター構内（アカマツ林）にそれぞれ設置しました。

ヤマブシタケについて野生株を殺菌原木法により4か月間培養した後、試験地林内に埋設して子実体の発生状況を観察しました。殺菌原木法の概要は図のとおりです。

ヤマブシタケは、菌床栽培では1サイクル35日間の短期間で1ビン当たり100gを超える子実体生産が可能ですが、普通原木栽培では僅かな子実体発生が確認されているに過ぎません。

今回の検討結果では、全ての試験地において、林地に埋設直後から原基形成が始まり、9月中旬から10月末までに1本の原木から1個100gを超える大型の子実体発生を確認しました。また、翌年の5月末から6月中旬にかけても発生があり、秋のみでなく春から初夏にも収穫できることが分かりました。

写真-2～3に示したように、殺菌原木栽培により普通原木栽培では得られなかった大型子実体が、接種当年に容易に得られました。

さらに、菌床栽培と比較しても大型で充実した子実体でした。

原木伐採 → 玉切り → 袋詰め → 殺菌 → 冷却 → 接種 → 培養 → 地中埋設 → 収穫

図 殺菌原木法の工程



写真-2～3 左から普通原木栽培、殺菌原木栽培のヤマブシタケ

3 実践例

(1) 直販所「でくのぼう」(臼田町勝間)

代表である市川正道氏を中心に、地域の山菜・きのこ同好者が集まった「星の町うすだ山菜きのこ生産組合」により運営されています。組合として生産したキノコ・山菜の他、地区内の農林家からも仕入れて販売しています。生産の中心となる臼田町平のホダ場には、林業総合センターの試験地も設置しており、殺菌原木栽培としてはマイタケ、マンネンタケ、ヤマブシタケなどの栽培を実践しています。ヤマブシタケは機能性キノコとして高値で販売されています。

(2) 「山辺ワイナリー農産物直売所」(松本市入山辺)

JA松本ハイランド入山辺支所管内の有志で結成している「入山辺舞茸振興会」は、会員の共同作業で殺菌原木法によりマイタケのホダ木を養成しています。ホダ木は、会員が希望数を買って各自がキノコを発生させ、JA直営の「ワイナリー」にある直売コーナーで販売しています。

美ヶ原高原を訪れた観光客を中心に時期になれば飛ぶように売っていますが、マイタケの出荷が始まる9月下旬には、マイタケ以外の原木キノコは少なく、観光客から「もっといろいろなキノコが欲しい」と強く要望されます。

そこで、林業総合センターの試験結果で、9月中旬には発生することが分かったヤマブシタケの殺菌原木栽培に、本年から取り組むことになりま

した(写真-4)。これが成功すれば、毎年新たな殺菌原木栽培の品目に挑戦したいとの会員の意向です。



写真-4 培養中の「殺菌原木ヤマブシタケ」(入山辺舞茸振興会)

4 おわりに

ヤマブシタケの他にクリタケ、ヌメリスギタケモドキ、チャナメツムタケ、シロナメツムタケ、ムキタケなどについて殺菌原木栽培を検討しています。今後、地域や生産者の実情に応じて、キノコ栽培方法の選択肢の一つとして、殺菌原木栽培が拡大され定着していく可能性は高いと考えられます。

(特産部 増野和彦)

《参考文献》

長野県林業総合センター：「技術情報」109号、2002